

威風堂々

「この釣りを始めて干支が一回りした頃・・・
ゴールデンウィークにも係らず、近郊の管理釣り場に出かけた日のこと
だった。」

その年は仕事が非常に切迫していて、新緑の時期を迎えても休日不問の
フォロー会議が日夜続く状況に、私もこの騒動に巻き込まれて夜9時のフ
ォロー会議に出席しなければならぬ・・・しかし、その小一時間前後以
外は全くの日常と変わらなかつた。

「ホンマに・・・あの会議が無かつたら溪行けんのに!・・・」

・・・そう思っても致し方なく、せめて気分だけでも「溪流釣り」に似せる
為、普段は二ブーツで入川するところをウェイダーを履いて入溪(川)
した。

「この時期いく・・・もしかしたらドライで出るかもなあ?」

確かに、入門当初にドライで初めてニジマスヒットさせたのも山桜の
花びらが漂う時期のこの釣り場である。

この釣り場の直ぐ上手には【屏風岩】と呼ばれる景勝地があつて、その
辺りに植えられた山桜がゴールデンウィーク前後に満開となる。

そしてその花びらが散り始めた頃、この釣り場でも極めて短期ながらド
ライフライの釣りが楽しめた。

(ニニの上手・・・【屏風岩】の下の橋まではフリーストーンやったな?)

この釣り場のメインスポットは二段に分かれたゆったりした流れのプー
ルで、上手のプールはかなり上流までフラットが続いている。

その日はいつもとは異なり、このフラットをパスして詰め上がり、フリ
ーストーンをドライで狙ってみることにした。

上流に進みながらいつもの釣座である「柿木前」を
パスし、フラットな水面を見ながら川岸を歩いてい
ると藪が川の中まで張り出していて、川岸沿いに往
来する釣り人をその場で遮る天然柵が出来ていた。

察するに、この釣り場を管理される方が・・・「ここ
から上手に上がる客は居ない!」と見切つて藪払い
を止めた場所なんだろう・・・竹に葦に蔓草が絡ん
だ大きな屏風の様な藪になっていた。

「なんじゃい! 【屏風岩】と違おて 【屏風藪】か
い? (笑)・・・ホンマ邪魔やし!」

そこから先へ進むには川の中に入ってこの屏風の
様な藪を迂回するしかない。

溪相もこの辺りまでがフラットでこの藪を越えた
辺りからフリーストーンとなっている。

「ここから先も 【屏風岩】 の前まで延々釣り場の
エリア内やし! 釣る奴が居らんだけやろあ・・・」

・・・そう言いながら川の中に足を踏み入れて慎重
に【屏風藪】を迂回し始めた。

「ウェイダー履いてきて正解やったし!・・・長靴
やったらアウトやんけ! (笑)」

【屏風藪】を迂回すると、また川岸を歩いて進む
ことができ・・・暫く進むとフリーストーンとフラ
ットの境界とも言える段差の低い落ち込みが見えた。

「よっしゃ!・・・あそこから攻めて見よかあ・・・」

その日は魚もすっかり遡上していて、午前中だけで
30匹に届くか否かのドライフライ大爆釣に恵まれ
た。



「ああ……よお釣ったし……
何時や？昼か？……いったん上が
るか？」

溪に行けない憂さ晴らしが上手
く行ったが為か、腹が減ってどうに
もならなくなっていた。

いったん車に戻って昼食とした
後に、夕方まではいつもの「柿木前」
でのんびりイマージングを堪能し
てから会社に向かっても夜の9時
には余裕で間に合う……

「明日も来たるかあ？……」

……等と思いつながら川岸を下って
いた時だった。

「……なんや？」

耳を澄ますと川のせせらぎに交
じって微かに鼻歌が聞こえてくる。

「……誰か唄おてるん？」

山深く分け入った先なら狐狸
の仕業と疑いもするが、都心近郊河
川の真昼間にそんな狂波に惑わさ
れる訳もない。

声の主はやはり釣り人の様で、例
の【屏風藪】の向こう側から聞こえ
てくる。

察するに上がれる一番上手まで
上がってきて、他の釣り人が居ない

事に気を良くして釣ってる最中で鼻歌気分になられたんだろう……

やがて【屏風藪】を挟んで下手に鼻歌釣り師……上手に私……鼻歌は
容赦なく聞きたくもない私に向かって藪を突き抜けて聞こえてくる。

鼻歌「ナァ……ナァナァナァ……」

吾輩（……誰も聞いてへん思て、調子よお歌とてからに……笑）

「……までの距離となれば聞きたくなくともしつかりと旋律が聴き取れて
声の主が余程の音痴でない限り曲目も知っていれば判ると言う状況であ
る。」

鼻歌「ラァ……ラァラァラァ……ラァ……ラァ……」

吾輩（なんちゅうく曲う歌おとんねん……笑）

曲目はイギリス第二の国歌とも称されると聞く、エルガーの《威風堂々》
である。

先程から気分が高揚されているのか、第一番中間部分の『希望と栄光の
国』（"Land of Hope and Glory"）と称される旋律が繰り返されている。

鼻歌「ナァ……ナァナァナァ……」

吾輩（……未だやるんかい！……笑）

この状況を無視していきなり「毎度！」と【屏風藪】を回りこんで挨拶
するのも関西風で良いかもしれないが、気付いておられないとは言え……
余りにも見事に私の存在を無視した様に謳歌されている事もあって、上機
嫌から羞恥の底に突き落とす様な事はヤバイと感じ取れた。

已む無く煙草に火をつけて暫し休憩がてらに鼻歌が止むのを待つことに
した。

鼻歌「ラァ……ラァラァラァ……ラァ……ラァ……」

吾輩（早よお終わらんかいや！……出て行かれへんやろ！……怒）

と……が一向に止む気配がない。

鼻歌「ナァ……ナァナァナァ……」

吾輩（まだ、やるんかい！ホンマ……呆）

鼻歌はだんだんと音量が大きくなり、オーケストラが参加した様なオペリガード含みのハミングになってきていた。

やがて・・・

鼻歌「Land of Ho~Ape and Glo~Ary,・・・」

吾輩「うっ！・・・うっ歌いだしよったし！・・・大呆

鼻歌「God, who made thee mi~Aghty,」

吾輩（・・・）

鼻歌「Make the nightier~ ye~A,」

吾輩（終れえ！終れよ！ホンマ・・・）

鼻歌「ダッダッ・ダダドゥダ・ダダディダ・ダ・・・」

吾輩（はあ？？・・・誰が行進せいと言ったんや！・・・普通そこまで歌わ

んやろー！）

いい加減待つのも嫌になって、少し離れた上手で水音を立てながら下ることにした。

鼻歌「ダッダッ・ダダドゥダ・」

「ハッシャァーン！」

鼻歌「ダダディ・・・（静寂）・・・」

「ハッシャ・ハッシャ・ハッシャ・・・」

水音を立てた途端、行進曲はポーズボタンが押されたが如く急停止し、藪の向こうは静寂に戻っている。

今度は勢いよく水を蹴上げながら進む私が主役となり、藪を回りこんで鼻歌の主と二対面・・・

そこで目に飛び込んで来たのは、少々度肝を抜く様な釣り人であった。先程の鼻歌の相乗効果もあってか、非常に失礼だが笑いが込み上げて来て挨拶どころではない。

全身がバーバリー柄で包まれた【英国王室御用産品】のカタログ通販から飛び出した様なイデタチである。

確かに、鳥打帽にフィッシングバック・・・そこに加わってもフィッシングジャケット程度は時折お見受けすることもあった。

しかし、加えてニッカポッカを穿き、ネクタイまで着用した正装を目にしたのは始めてだった。

吾輩「すんまへえ〜ん」

笑いを堪えながら小声で断りを入れて素早く岸に上がりその場を立ち去ろうとした。

鼻歌「はい！・・・どあ〜どあ〜こちら〜どあ〜」

意外にあっけらかんとした屈託無い笑顔で、そのお姿は威風ならぬ異風堂々・・・しかし、私の方は笑いを堪えるのが精一杯でこれ以上声を発すると吹き出しそうである。

軽く会釈してその場を早足で立ち去り、「柿木前」を通過したところで護岸に沿って身を隠すと、堪えていた笑いが一気に吹いて出た。

「クククッ！・・・プツ・・・ハハハッ！・・・」

新緑眩い五月晴れの空を見上げて大笑い・・・

「なんじゃ？あのカッコ！・・・ハァァ・・・笑しよんの！・・・」

漸く落ち着いて車に戻り、そして朝食を終えて午後の部を再開・・・

「柿木前」でライズハントを交えたイマージャーの釣りをイメーシしたが、あ



いにく午後一の客に釣座を押しやえられてしまい、已む無くその上手に入る
ことになった。

そう・・つまり、あの英国カブシの鼻歌釣り師とある程度の距離を置き
ながらも並んで釣る羽目となってしまった。

午前程の笑いは込み上げてこないが、鼻歌を思い出すと顔がほころび始
末に負えない。

しかし、この様な状況もポツリポツリと当りが出だすと、いつしか釣り
に没頭して忘れたものとなっていった。

イマージャーでヒョイヒョイと誘い上げると水面直下で反転して面白い
様にヒットする・・この日はこの釣り方が壺にハマった様に釣れ続いた。

ところが、これと同等・・いやこのイマージング以上に好調と見えたの
が見掛倒しの英国カブシと見受けた鼻歌釣り師である。

特筆する様なキャストイングでもなく、どちらかと言えば無造作に適当
に上流側に投じて暫く放置した後、ロッドの角度を微妙に変えてみたりメ
ンディングを繰り返して下流側に流し切るだけである。

なんとなく気になってチラ見していると、ウェットフライによるドロッ
パーステムの釣りであると見受けられた。

(結構釣れるんや・・ウェットって・・)

実はその頃・・私も興味を持ち始めた釣りで、何となく真似ごとで試み
ては見るも、今一つ掴みどころがなくつつい他の釣り方に変えてしまい、
毎回煮え切らない状態が続いていた。

結果的に何時まで経っても中途半端な状況にあったのが、このウェット
フライによるドロップパーステムの釣りだった。

(・・あー!・・また釣ってるしー!)

「こちらも(負けては居られん!)・・とばかりにイマージャーを引っ張り
まくる。しかし、ヒットペースは明らかに鼻歌釣り師のウェットフライに

軍配が上がっていた。

やがて私が誘い上げる毛鉤にその年に初めて放流されたブラウンがヒッ
トした。

体側のマーキングを確認すべく、ネットを持ち出して慎重に取り込んで
魚のボディチェックをしていると・・・

鼻歌「ここはブラウンも釣れるうすか?」

吾輩「ああ・・今年から入れはった見たいですわ!」

鼻歌「そおろっすかあ・・」

吾輩「でも少ないでんな・・数は・・」

鼻歌「ここはよく来られるうすか?」

屈託無い笑顔で話しかけて頂いたが、聞き慣れない訛りで関西近畿圏の
方ではないことは直に理解し得た。

その後も色々と問われては私が相槌を打つ・・・
ブラウンを放して煙草に火をつけた後も、屈託無い笑顔で話をされ、
気が付くと川岸に裏返しで放置されてあったボートに座り込んで話し込
んでいた。

最初は非常に朴訥な話し方とも受けてとれたが、熱が入ると機関銃の如
く言葉が連射される様な訛りである。

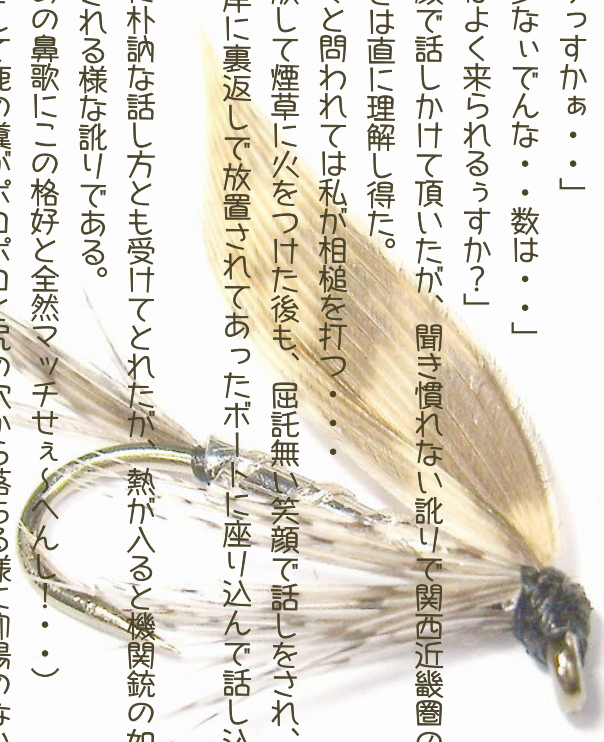
(なんか、あの鼻歌にこの格好と全然マッチせえへんし!・・)

しかし、時として鹿の糞がポロポロと尻の穴から落ちる様に抑揚のない
言葉が淡々と出続ける訛りでもあった。

話を伺うとお生まれは北海道(札幌)で4月に北関東(群馬か栃木?)
から西宮に引っ越してきたばかりとのこと・・・

この辺りの溪流事情がサッパリわからず、知人に聞いてこの管理釣り場
にやってきたとのことだった。

私も北近畿の溪流事情をお話し、その方も北関東の溪流事情をお話され
たが、その辺りの内容は全く記憶に残っていない。



鼻歌「フニは何時頃までえつつすかあ？」

吾輩「もろゝゝこの連休が終わった
らその次の土日で終わるんとち
やいまつか？ゝ確かいつもそ
んな感じですよー！」

鼻歌「んじゃあ？ゝ次い何処行っか
なあゝ？」

吾輩「西宮やったら兵庫の溪流やけ
どゝゝ最近パツとせんしゝゝサ
つき言うた安曇川か愛知川が
エエんとちやいまつか？！」

鼻歌「滋賀っすうかあゝ？」

吾輩「つつきやってはったウエットフ
ライの釣りなんかも本流辺りで
出来るんとちやいまつか？」

鼻歌「あゝ！ゝゝウエットもやら
れるうすか？」

吾輩「いやあお宅程本格的やのおゝて、どんなもんなんや？ちゅう程度
のお試しでっさかい全然釣れてまへん！(笑)」

鼻歌「二つち(関西圏)はウエットの人はどうすか？多いすか？」

吾輩「いやあ、やっぱり殆どドライちやいまつか？ゝ後にはニンフやねゝ

あそこのでやっただはるルースニングそのまんまゝゝ」

鼻歌「そあゝつすかあゝゝ」

吾輩「お宅はウエット専門？ですのん？ゝゝ」

鼻歌「今は、そあゝつすねえゝゝ」

吾輩「そろそのカックとしてロングリーダーとかシンセティックフライと
かゝゝ無いわな！」



鼻歌「4年自っすかねえゝゝウエットにハマってゝゝ(笑)」

吾輩「私や、何べんやっても何か掴みどころのおゝて、何時ま
で経っても中途半端！ゝゝ今一つですわー！(笑)」

鼻歌「いやあゝゝ実は私もねえゝゝ」
ゝゝそう話し出すと、脇に置いたハーディーのフィッシャーマ
ンズバックから何かを取り出そうとされた。

殆ど察しはついていたが、一応こちらから口に出すのも話の腰
を折ることもならない為、暫し黙って待つことにした。

鼻歌「ゝゝコイツを売り付けられてえゝゝ」

吾輩「出たあゝゝアルミのフライボックス予想通りやしー」
鼻歌「コレ買ってからあゝゝ段々とこの釣りが主役になっちゃ
ったんっすねえゝ(笑)」

そして、この鼻歌釣師が朴訥な口調で語り始めた。

ざつと要約すれば次の通りである。

- ・興味本位でウエットを始めたが最初はサッパリだった。
- ・毎回、直ぐにニンフやドライに切り替えてしまい継続して頑
張れなかった。

- ・その頃は特に専用の毛鉤箱を所持しておらず、持ちあわせのフライボ
ックスに適当に入れていた。

- ・ある日、行きつけのフライショップの店主にゝゝウエットをある程度
モノにするならウエット専用のフライボックスを持つことが手っ取り
早い」と勧められた。

- ・すると店主が言った通り、せっかく高価なフライボックスを購入した
ので毛鉤を巻いて詰め込むことを考える様になった。

- ・そして暫くはタイニングの全てがウエットフライとなり、釣りに出掛け
ても他の毛鉤の持ち合わせが手薄になっていた。

・結果的にウェットで釣るしか手立てがなくなり気付くとウェットフライ一辺倒になっていた。

朴訥ながらも、時折機関銃の如く言葉が発射される語り口である。

鼻歌「コレ買って無かったらあ…….…….コレまで

ウェットにのめり込まなかったあゝ思い

ますねえ〜(笑)」

吾輩「そうなんや!…….確かに今、私も適当なフラ

イボックスに入れてますわ!……. (笑)」

彼の講釈ではこのフライボックスを所有すると他の毛鉤を駆逐し、ウェットフライ以外は興味がなくなることも受け取れる話で、当時の私にはちょっと信じ難いものだった。

鼻歌「結局、タイミング先行でハマっちゃったっす

ねえ……. (笑)」

吾輩「そやけど、コレまで(毛鉤が)揃いたら圧巻

でんあ…….」

フィッシングバッグから取り出してボックスを開けて見せて頂いたフライの数々はとても魅力的で、私なんぞが俄かに辿りつける様な世界ではないと思えた。

鼻歌「いやっ!…….こおれあタネも仕掛けも有ってね…….」

…….そう言つとフライを一つボックスから取り外して私に差し出された。

鼻歌「出来い(栄え)悪いっしょ! (笑)…….コレでも並べるとそれなり

に見えるっす。…….ホレ(笑)」

…….そう言つてボックス毎私に差し込まれた。

吾輩「いやあ…….よお〜出来てまっせえ…….」

…….そう言いながら、至近距離で毛鉤を拝見する中には出来栄がよ



ろしくない毛鉤も散見できた。

鼻歌「並んでる〜ころ見ないでえ〜フライ一個見ると雑っしょ? (笑)」

吾輩「いやいやあ…….なんの……. (笑)」

一通り拝見させて頂き、ボックスとフライをお返しました。

鼻歌「んでも、これで結構釣れるうんでえ……. (笑)」

吾輩「……. (笑)…….」

この後、目前でライズが始まり出したので、二人とも「逃してはなるまい!」と即座に釣り再開…….

ところが釣りは中枢神経か自律神経が勝手に対処していて頭の中は先程のウェットフライで一杯である。

(ウェットってライズ狙いでも通用するんかい?!…….)



程なくお隣の鼻歌釣り師は大爆釣に突入・思わず駆け寄り声を掛けた。

吾輩「爆釣でんがな！凄いなあ・・・(笑)」

鼻歌「これっすね！コイツが今日の当り鉤！」

そうおっしやると惜しげもなくフライボックスから2個の毛鉤を差し出された。

鼻歌【黄色(ブロフェッサー)】が上(ドロッパー)でえ、【緑(グリズ

リーキング)】が下(リード)・・・【黄色】が当りっす。(笑)」

「自分のタックルを指差して説明され、「良ければやってみろー」言う素振りで促された。

鼻歌「最初は浮いてますけどお、暫くすつと勝手に沈みだすんでえ、そ
うなったら後は漂わすだけでイっす。」

ポカンと口を開けて何も答えられない私の横で、無造作に投げ込んでメ

ンディング・・・

鼻歌「・・・あんな感じで黄色が見えるっしょ？・・・あんな沈め無いで大

丈夫っす・・・最初は沈めることに必死なりましたけどお、毛

鉤任せでえ・・・ホレ出た！」

水面直下を流れる毛鉤に何処からともなく魚が浮いて素早く銜えフック

アップ・・・

吾輩「ハア・・・ビックリやなあ・・・」

鼻歌「・・・ねっ！・・・あんな感じっす！・・・(笑)」

「こうなると黙って見ているだけでは勿体ない・・・」

すぐさま自分の釣座に戻り、早速頂いた毛鉤で同じ様にタックルをセツ
トアップし投じて見た。

最初は毛鉤が二匹並んで水面を流れるだけである・・・

暫くして水に馴染み始め、先っぽに結んだ【緑】が沈んで見えなくなっ

た頃、突然ニジマスが水面直下の【黄色】を襲った。

吾輩「おっ！釣れた！」

鼻歌「・・・(笑)・・・簡単っしょ！・・・後は勝手に釣れるっす！・・・(笑)」

・・・喜ぶ私の姿を横目で見ながら満面の笑みを浮かべ、大声で話しかけ
てくれた。

その後も頂いた毛鉤で経験した事のない釣りを堪能・・・

(もしかしたら、ワシでも頑張ったら・・・何とかあんなフライボックス

が持てるんやろか?)

そして急激にウェットフライに惹かれて行くのが自分でもハッキリと感
じ取れた。

やがて目のライズも小康すると、けたたましくリールを巻き上げる音
が響き渡り、ロッドを片手に鼻歌釣り師がこちらに歩いてくる・・・

鼻歌「お先いっす！・・・またゆっくり！(笑)」

吾輩「・・・あぁどうもお・・・(笑)」

軽く挨拶を交すと私の後を通り過ぎ、下手に歩いて行かれた。

暫く後姿を目で追いながら・・・

(ウエットフライかあ?・・・)

午前中・・・あれだけ滑稽に見えたイデタチであったが、夕方となって引き上げて行く後姿はそれなりに映えて格好良く見えた。

鳥打帽にフィッシングジャケット・・・

加えて度肝を抜く様なニッカポッカ・・・

どれもこれもバーバリー柄一色・・・

行進する様子に去って行く雄姿は《威風堂々》の曲調が似合う様にも思えてくる。

「頂いた毛鉤」無くならん内に(サンプル)に取っ
「ごさー」

リールを巻いて毛鉤をカットし大切に仕舞い込んで
下手を見る・・・

やがて、遠くにそのお姿をお見受けした時、言から
ぶら下げたフィッシングマンズバックの網目部分が白
銀に輝いていて、それは紛れもなく私に差し出したホ
イットレーのフライボックスであることが見て取れた。

それから帰路の車中でも、はたまた夜の会議の最中も・・・

頭中は《威風堂々》が鳴り響き、臉を閉じると最後にお見受けした白銀
の輝きがチラチラしていた。

(騙された思おてえ・・・使おて見よかあ?)・・・

それから暫く・・・こんな思いが頭から離れられずに思案している最中も、
不思議と《威風堂々》が鳴り響き続けた。



そして遂に・・・

それまで全く興味がなかったアルミのフライボックス・・・

Richard Wheatley 1422 を手に持てるようになった。

そしてその日から・・・

ウエットフライに傾向する様になって行った。



しかし、考えてみると・・・
余程の事がない限り、新緑
の時期にこの管理釣り場
に出向くことはあり得ない。

察するに仕事に切迫して
この釣り場に出向くしかな
かった事も・・・

ひとつの巡り合わせが仕
組まれた流れだったのかも
しれない。

そして度肝を抜く様な英
国スタイルや、笑わせる様な
《威風堂々》の鼻歌も・・・

确实にこの釣り師との巡
り合わせを成立させる為の
仕掛けとも思えてくる。

とにかく、このフライフィ
ッシャーとの巡り合わせが、

ウェットフライフィッシングに今一つ馴染めない状況から一歩踏み出す
キッカケとなった。

・ホイトレーのウェット専用4面クリップのフライボックスを購入す
ることに

・水に馴染む程度で釣りになるので沈めることに拘り過ぎないように

彼のこの二つの助言がなければ・・・

絶対にホイトレーには手を出さなかつたし・・・

私のウェットフライフィッシングも煮え切らず・・・
自然消滅していただろう・・・
とにかく、この巡り合わせにはとても感謝している。

そして今でもこのホイトレーを手にする・・・
時折、彼を思い出す事がある・・・
すると頭中には・・・

必ずエルガーの《威風堂々》が流れている。
Land of Hope and Glory, (希望と栄光の国)・・・
そして今尚・・・

希望に充ち溢れたウェットフライの・・・
栄光とは程遠い試行錯誤が続いている。



あとがき

その後、何度かこの釣り場に足を運んだものの、二度と彼に逢うことはなかった。

歳は私と同年代にお見受けしたので、度肝を抜いた英国風のイデタチも、今では《威風堂々たる風貌》を演出する装いに過ぎなくなったであろう・私なんその釣人では到底辿りつけない域である。

彼の助言で購入に踏み切った Richard Wheatley のアルミボックスも、1422を皮切りに1432・1412・1402とウエット専用4面クリップタイプを制覇し、1407・1408とドライフライ併用タイプまで取り揃える様になってしまった。

入門当初からその存在を知りながら、頑なに拒み続けたアルミのフライボックスをココまで取り揃える事になったのは、あの日彼が言った・

「いやっ!・・・おれあタネも仕掛けも有ってね・・・」が、全てを物語っているのかも知れない。



このウエット専用のフライボックス・・・

実はコイツが曲者で平面クリップタイプである為にドライやニンフ等・・他の毛鉤を寄せ付けない。

しかも、クリップ一個に対してフライ一個を装着する様にできていて、各クリップが物欲しそうに毛鉤を要求する仕掛けになっている。

例えばドライフライボックスに見受けるコンパートメントなら、適当に各駒にフライを入れるとそれなりになる。

また、ニンフに多用されるフォームタイプもスリットこそ切り込んであるが、適当な間隔でフライを刺せば、これまたそれなりになる。

ところが、このクリップタイプは、まるで座席がきっちり定められた映画館の様なボックスで、定員に満たない場合は明らかに空席が残る。

この空席を一系列まるごと放置すると微妙に気になってしかたがなく・・かと言ってまばらな着席状況では何となく落ち着かない。

そしてこれまた不思議な事に、個々の出来栄が悪くとも席を詰める様に並んで着席させると、それなりに見えてしまう。

結果的に常に定員で満席にして置きたいと思うのが半ば義務の様に押し掛かってくる様な感覚であった。

つまり、せっせとウエットフライのタイミングに励むしか解決する手立てがないのである・・(笑)

そして満タンになったコイツを見ていただけで楽しくなり、気付くと二つ・三つ目とウエット専用ボックスが増えて行った。

こうなると当然ながら、タイミングの全てがウエットフライとなり、釣りに出掛けても他の毛鉤が手薄でウエットフライが溢れかえっている状況となる。

詰り、ウエットで釣るか半ば立てがなくなる状況に追い込まれてしまう。これも、半ば強引に窮地に追い込む様なプロセスに見受けられるかもしれないが、コイツに示した過程は全てが楽しくて仕方なかった。

もし、ウエットフライが今一つ馴染めないと感じておられるドライフ
ライフィッシャーの方が、ウエットフライフィッシングを何とか少しはモ
ンにしたいとお考えの場合・・・

ウエット専用アルミフライボックスを購入なさるのがよろしいかと・・・
片側が駒仕切りのドライフライ併用タイプでは中途半端で・・・
ウエット専用4面クリップタイプでなければ効果がないと思われま
す。
Richard Wheatley 1412 か 1422 を購入なされば・・・
後はこの箱が勝手に誘ってくれると思われま

しかし、考えてみますと・・・

私はあの日、英国伝統職人造の毛鉤箱を勧められるに留まりましたが・・・
これは英国流釣師の正装を勧められることと本質的に余り変わらないし
べルと見受けま

・・・とすれば、このフライボックスに加え・・・

ニッカポッカを穿き・・・

ネクタイで正装し・・・

《威風堂々》を合唱すると・・・

更に一層加速的にウエットフライフィッシングがモノにできるのかもし
れませんが・・・笑

(・・・あほくさい・終わり方すな！)

2010年 師走の頃

